

野口英世の体験談

とんだ玉三郎

下町に店を構える鈴木理髪店の店主は。仕事柄お札を手にすることが多いが、お札に書かれている番号の験を担ぐ。ある日の午後八時過ぎ、店も閉店し、明かりも消され、ひっそりとした店内。鍵をかけられたレジの中には、五千円札、千円札、五百円玉、百円玉がお釣り用として、分けされたトレーにきちんと揃えて入れられている。一万円札はお釣りとはならないから閉店後に取り出されているので一万円札のトレーは空である。

彼ら、お札たちは、それぞれのトレーの中で「福沢諭吉のお札」、「樋口一葉のお札」、「野口英世のお札」とお互い呼び合っている。

たくさんのお札が登場するこのお話はレジの千円札のトレーの中で展開する。

一枚のお札がトレーの底に張り付いたように横たわっている。そのお札、彼をかりにレジの主人としておこう。なぜ、そう呼ぶかは読み進むうちにわかる。彼は上のほうに向かって呼び掛けた。

レジの主人「おーい、皆、俺は世間のことが知りたいんだ。なにせ、生まれてすぐに銀行からキャッシュディスプレイペンサーに直行。そこから俺と俺の兄弟を引き出した男は、その足でこの床屋に散髪に来た。それ以来、このトレーの底に六年もいるんだ」

レジの主人のすぐ上に乗っているお札が驚いたように言った。「へえ、どうして出してもらえないんだ」

レジの主人は、自分に書かれた番号——記番号とも言う——を指さして言った。

レジの主人「俺の記番号を見るよ、7が六つも並んでいるだろう。この店主は、ラッキーセブンというのか、俺をトレーの底にずっといれておけば、お札を呼び込む、店が繁盛すると思っ込んでいるようなのだ」

レジの主人にとつては、毎日、レジに入れられては、お釣りとして出ていくお札はお客さん、すなわちゲストということだ。ここからはお札たち個々を区別することなく、「ゲストさん」と呼ぶことにする。あるお札が興味深そうに

訊いた。

ゲストさん「変わった人もいるもんだな。それで効果あるのかね」

レジの主人は考え込むようにして言った。

レジの主人「店主はだんだん年をとってくるし、若者はもつとしゃれた店に行くようだから、この頃は年寄りの客ばかりだ。年寄りには髪の伸びが遅いから頻繁には来ないので、客も減ってきている。御利益があるようには思えないな」

ゲストさん「でも、六年も生き延びたってことじゃないか。俺たちは、お釣りとして世間を飛び回っているので、痛みが激しく寿命はせいぜい、一年か、長くても二年でお払い箱だよ」

あるお札、不満そうに発言した。

ゲストさん「福沢諭吉のお札は寿命が四、五年というじゃないか。俺も福沢家に生まれたかったよ」

別のお札がなだめるように言った。

ゲストさん「奴らはあまり、動き回らないからだよ。なんせ、お釣りになれないんだからな。俺たちのほうがよっぽど働いているよ」

レジの主人「長生きすれば、いいってもものじゃないよ。ここはまるで刑務所だよ。娑婆に出られないんだからな。言う通りだよ。俺たち、お札は世間を飛び回ってこそ、値打ちがあるってもんだ」

また、あるお札の発言。

ゲストさん「飛び回るのも疲れるよ。自販機では、たくさんセンサーを当てられて本物がどうかをいちいちチェックされる。いい加減にしてくれよと言いたくなる。それに機械の調子が悪くて中で詰まってしまう、引き裂かれて殺されるかと思ったこともある。店員に機械を開けてもらってやっとのことで救出されたがね」

レジの主人「毎日、トレーに入れ替わり立ち代わり入ってくる君たちが羨ましいんだ。なにせ、こう見えても好奇心は人一倍、いや、札一倍あるからね」

ゲストさん「俺たち一日中、飛び回っているから、そんなことを考える暇なんかないね」

レジの主人「それで、店が閉まってから皆の話を聞くのが楽しみなんだ。君たちが経験してきたことや、日頃、感じていることを聞かせてくれな
いか」

レジの主人のすぐ上のお札が口を開いた。

ゲストさん「同情するね。皆が体験してきた面白い話をお互いに話してみようじゃないか」

それに賛同するお札が出てきた。

ゲストさん「そうだな。他人、いや他札がどんな経験してきたか興味があるしね」

すると、皆から一斉に「賛成だ、是非やろうよ」という声があがった。

ここから、お札たちの経験談が展開する。

あるお札が口火を切った。

ゲストさん「じゃ、俺から話すよ。さい銭泥棒を目撃したというか、俺をさい銭箱から盗んだ奴がいるんだ」

レジの主人「なかなか、出来ない経験だね」

ゲストさん「深夜だったな。寝っていると突然、暗がりですから懐中電灯でさい銭箱の中を照らされて目が覚めて、一瞬、目がくらんだよ。見上げると、そのさい銭泥棒と思わず目があった。相手もドキッとしたよ。うだ。しかし、すぐに立ち去った。たぶん、警備員か誰かやってきたんだろう」

レジの主人が身を乗り出すようにして訊いた。

レジの主人「それで」

ゲストさん「十分もすると、そいつが戻ってきたんだ。周囲を見回しながら懐中電灯で中を照らして、上からゴミを拾うときに使うマジックハンドのようなものをさい銭箱に差し入れて、俺を器用につまみ上げたんだ。一瞬の出来事だったな。かなり、慣れてるようだった」

レジの主人は興味深そうに矢継ぎ早に訊いた。「どんな奴だ、そいつは」

ゲストさん「年寄りのようだった。少ない年金生活で金に困っているように見えただね。俺を使って安売りショップで賞味期限切れ間近の訳ありインスタントラーメンをどっさり買ったよ」

別のお札のおさい銭になった経験談。

ゲストさん「俺もおさい銭としてさい銭箱に投げ入れられたことがある。その神社の神主は俺を取り出して、酒を買いに行っちゃったよ。神主の小遣いにされるより貧しいお年寄りを助けたとすればかえってよかったん

じゃないかな」

レジの主人「悪いことをする神主もいるんだね。その神主、罰があたるんじゃないか」

あるお札、しんみりした口調で話す。

ゲストさん「そのさい銭泥棒の年寄りには同情するよ。俺も貧乏な人に出会ったことがある。確か、母子家庭の母親だった。財布にはお札は俺だけで、後は小銭ばかり。俺が財布から出て行く時には悲しそうな顔をするんだ。俺は魔法を使って、自分のクローンを何枚か作ってやりたいと思ったよ」

レジの主人「豊かな人と貧しい人とは俺たちに対する見方は随分、違ううんだろうな」

これまでの話に皆がシーンとした時に、話題を変えようと思って、あるお札が言う。

ゲストさん「俺の経験はちよっと、変っててね。財布に入って海外に連れていってもらったことがある」

レジの主人「へえ、海外旅行か、いいな」

ゲストさん「それが、とんだ目にあつてね。行先はどこか忘れたが東南アジアの国だった。着いた空港で持主が現地通貨と交換したので、俺は両替屋のトレーに入れられたんだ。すると、変な匂いが下からしてくるんだ。トレーが二段になっていて、下のトレーには現地通貨が入っていたんだ。そのトレーを見ると擦り切れて、紙幣の図柄もはっきり見えないくらい汚れた現地の紙幣がどっさり入っているんだよ。あの匂いはたまらなかったな。幸い、現地通貨を日本円に換えるにきた人が現れて、日本に連れて帰ってもらって助かったけれど。もう海外はこりごりだ」

海外経験のある別のお札。

ゲストさん「俺も海外に行った経験があるよ。ヨーロッパの国だったね」

レジの主人「ヨーロッパか。それは羨ましいな。ヨーロッパならひどい目には合わないだろう。」

ゲストさん「ヨーロッパの国はどこでも日本の金で現地通貨と交換してもらえると思っているようだが、ユーロ圏以外のなかには交換してもらえない国もあるようなんだ。その国はユーロを使ってなかったので、

両替機ではじかれて、持主が俺に毒づくんだ。『偽札をつかまされた！』てな」

レジの主人「無事に日本に帰れてよかったな」

ゲストさん「海外に持っていくのは、俺たち、野口家のお札がいいらしいと言われているんだ」

レジの主人「どうしてだ。嵩張るだろう。福沢諭吉や樋口一葉のほうがいいんじゃないのか」

ゲストさん「その都度、使うだけ両替すればいいからね。国によっては現地通貨を日本円に替えてくれないところもあるんだ」

レジの主人「なるほど、使えない金を日本に持って帰ってもつまらないというわけか」

別のお札が口を開いた。

ゲストさん「俺は洗濯機に入れられて、目を回したことがある」

面白い経験でもないというようにゲストさんが言った。

レジの主人「よくある話のようだな」

ゲストさん「それが一回だけじゃないんだ。ズボンのポケットに入れたまま、忘れられてズボンを洗濯するたびに洗われるだから、たまったものじゃないよ。偶然、見つけてもらって助かった」

レジの主人「それは大変だったね。似たような話はないかな」

ゲストさん「最近はある限り、聞かなくなったが、コロナが流行り始めた頃に、消毒液でいちいち拭かれることがあった」

レジの主人「そうか、世間ではコロナが流行っていたんだな」

他のお札が発言。

ゲストさん「そうそう、俺は最近生まれたのでそういう経験をしたことがないが、ちよつと上の先輩はよく経験したんじゃないか」

レジの主人「他に話題はないかな」

催促するレジの主人に、あるお札、思い出したように話し出す。

ゲストさん「コロナで思いましたが、店でお釣りとして客を渡す時に、手渡しじゃなく、感染を怖れて俺を投げて渡すヤツがいた」

レジの主人「随分な店員だね。トレーに入れて渡せばいいじゃないか。客はむかついただろうな」

ゲストさん「確かに渡された人はむつとしてたよ」

レジの主人「これに関連するような話はないかな」

ゲストさん「百貨店の新人研修に出たことがあった。お客に対してお釣りの渡す時の渡し方を教える研修で稽古台にされたんだ」

レジの主人「どうやって渡すんだ」

ゲストさん「こうするらしい。『お札の向きを揃えてお札に描かれている人物の顔が客のほうにくるようし、五千円札を一番上にして数え、客と一緒に枚数を確認、数え終わったら五千円札を一番下にして渡す』とね」

レジの主人「へえ、お札を投げた店員に聞かせてやりたいね」

茶色がかった顔をしたお札が思い切って言った。

ゲストさん「皆に嫌われると思って、言おうかどうか迷っていたが、辛い経験をしたことがある」

レジの主人「どんなことだ」

ゲストさん「『臭い』と言わないでくれよ。財布ごと、トイレに落ちたんだ」

レジの主人「流されそうになったとか」

ゲストさん「そのトイレは水洗じゃないんだ。田舎のポットン便所だった。俺たち、野口英世だけなら、持主も諦めたかもしれないが、福沢諭吉もかなりの数入っていたんで、持主が財布をひしゃくのようなものですくい挙げたんだ」

レジの主人「命拾いしたわけだな。もちろん、綺麗に洗ってもらったんだろ
う」

ゲストさん「もちろん、洗ってはもらった。しかし、茶色っぽい色は落ちないし、匂いは完全には消えないらしくて、自販機に収められたときには、まわりの奴が鼻をつまみ、いやな顔をされたこともあった」

レジの主人「俺は鼻のいいほうだけど、匂わないよ」

ゲストさん「そうか、よかった。何か月も飛び回っているうちに匂いも落ちたんだろう。そう考えると俺たち、お札というのはあまり綺麗なものじゃないね」

レジの主人「他に匂いに関する話題はないかな」

ゲストさん「俺のほうがいい思いをした経験だ。ただ、ちょっと屈辱的だったがね」

レジの主人「なんだ、にやにやして」

ゲストさん「俺が中年の男の財布に入っていた時のことだ。その男がキャバクラに友だちとふたりで行ったんだ。男たちの傍に前が大きくあいて胸が見えそうなドレズを着た女がふたり座ったんだ」

レジの主人「それが、匂いとなにか関係があるのか」

ゲストさん「俺の持主の友だちの男が気前よく、女の胸の谷間に福沢家のお札を『チップだ』と言ってねじ込んだ。すると俺の入った財布の持主の傍の女が『私にもチップ』とねだったんだ」

レジの主人「それで女の胸の谷間に滑り込んだというわけか」

ゲストさん「そうだが、女は『あら、私は野口さんなの』と不服な顔をしたんだ」

レジの主人「女は突き返したのか」

ゲストさん「いや受け取った。俺はその女の顔と、福沢さんを受け取った女の顔を見比べたよ。悔しいがその女は福沢さんをねだるような顔じゃなかったな」

レジの主人「それで」

ゲストさん「胸の谷間にいる間に女の使っていた香水と汗の匂いが俺の体に浸み込んでしばらく消えなかった」

レジの主人「女の顔はいまいちだとしても、いい思いをしたな」

ゲストさん「いや、樋口一葉と一緒に財布に入れられた時には、匂いが残っていたんだろう。変な目で見られていやだったよ」

レジの主人「樋口一葉と言えば女だ、この助平、変態と思われたんじゃないか」

ゲストさん「LGBTが注目される時代だ。それはないだろう」

レジの主人「なにか、他に面白い話はないかな」

ゲストさん「俺、贋金作りの片棒を担がれたことがあったね」

レジの主人「どういうことだ」

ゲストさん「外国人、東南アジア系だった男が、俺を複写機のガラスに載せて何度もコピーしようとするんだ。眩しくて仕方なかった」

レジの主人「そいつ、日本のお札は精巧に出来ていることを知らないんだ。所々に光学センサーに反応するマークがあるとか、インクの磁性があるとかね」

ゲストさん「そうだよ。俺たちはスーパードなどのレジで、いくつもの光学セン

サーと磁気センサーに通されてチェックされるじゃないか。あれもいちいち、疑うな、と言いたくなるけどね」

他のお札、そうだ。そうだとかならずきながら言う。

ゲストさん「汗とか、脂がついていてもはじかれることがあるらしいよ」

レジの主人「話を戻そうよ。その偽札作り、どうなったんだ」

ゲストさん「何枚か、コピーして使ったようだ。だぶん、ボケかけた婆さんなんかやっている小さな店にでも持っていったんじゃないかな。

どうなったことやら知らないが」

あるお札の発言。

ゲストさん「いつそ、コピーするなら、福沢諭吉にすればいいのに」

レジの主人「俺たち、野口英世なら、チェックも甘く、ばれないと思ったんじゃないのか」

ゲストさん「コピーして海外で安く現地通貨と両替して使うという手があるらしい。もちろん、街に出回っている普通のコピー機なんかじゃなくて、もっと精密な奴を使うのだろうか」

レジの主人「北朝鮮なんかやりそうだね」

顔のしわの多いお札にレジの主人が声をかけた。

レジの主人「それにしても、顔に随分としわがあるな」

ゲストさん「今朝、認知症の婆さんが、ただの紙だと思って、俺で鼻をかんでくしゃくしゃに丸めてゴミ箱に捨てたんだ。ゴミ出しに行ったその家の主人に見つけてもらって、シワを伸ばしてもらい、その主人に連れられてここに来たんだ」

レジの主人「危うく、ゴミとして焼却されるところだったんだな。命拾いしてよかったな。その婆さんの鼻水がついてないだろうな」

ゲストさん「その家の主人も気付いてないようなんです汚れてはないと思うよ。

でも、俺の運命もあとわずかだろう」

レジの主人「どうしてだ」

ゲストさん「銀行に戻ったら。検査されてしわくちゃとか汚れたものは、日本銀行に戻され、新品と交換、廃棄の身だろう。銀行も戻されたら終わりさ」

レジの主人は折り目の多いお札を見つけて言った。

レジの主人「随分、おかしな折り目がたくさん、付いているね。どうしたん

だ」

ゲストさん「俺が小学生の手に小遣いとして渡った時のことだった折り目ひとつついてない俺を使って、紙飛行機を作って飛ばして遊んでいるんだ」

レジの主人「無茶するな、その子。親は怒ったんじゃないか」

ゲストさん「そうだよ。見つかって母親から『そんなことをする子はお小遣いを減らします』と言われて、俺を取り上げられて、代わりに五百円玉を渡されて、しょげていたよ。お陰で、折り目が多くて、俺も同じ運命さ。まあ、銀行に戻されないように逃げ回るけどね」

レジの主人「所詮、皆、いつかは銀行に戻っていくんだよ。お札供養というのはないのかな。裁縫で使う針は、針供養なんてあるのに。裁縫の針なんかより、君たちのほうがよほど、世の中に貢献していると思うよ」

ゲストさん「そうだよな。お札（ふだ）供養はするくせに、人間たちは俺たちをいったいなんだと思っっているんだろうね」

あるお札、しんみりとした顔で言った。

ゲストさん「俺はトイレトペーパーを買うのに使われる時に、よく思うんだ。『俺たちの行きつく先はこれだ。シュレッダーにかけて細かく裁断されて溶かされてトイレトペーパーの原料になるだろう。ひとつのロールを作るのに、俺たち何人、いや、何枚いるんだろう』ってね」

この発言に同意するお札。

ゲストさん「そうだよ。さんざん、世の中を飛び回って行きつく先がトイレで、人様のしもの世話をして、そこから先は下水に直行とは、あんまりだよな」

レジの主人「俺たちはもつとも価値があるものだが、お役御免になったら終わりだ。そうになったらもつとも価値のないものになるってことだよ。

なにせ、メモ用紙の代わりにもならないんだからね」

ゲストさん「俺たちの運命もあと一年だろう。もう後輩は生まれていないそうじゃないか」

レジの主人「野口英世のあとは北里柴三郎と選手交代か。でも、なぜ、お医者さんが続くんだろうね」

ゲストさん「世の中、だんだんキャッシュレスになっていくだろう。俺たちの後に続く北里柴三郎のお札たちは、出番が少なくなってくるんじゃないかな」

レジの主人「お札って、なんなのかね。皆に有り難がってもらっているが、俺たち自身に値打ちがあるわけでない。銀行がバックにいるってことなのかな」

ゲストさん「俺たちの親が日本銀行だから、親の七光りで大事にされているってことか」

レジの主人「飛び回っている間は、値打ちがあるってことだよ」

ゲストさん「しかし、我々ほどよく世間をよく見ているものもないよ。人間様がかくれてなんかしようとしても、我々の目から、隠れようがない」

レジの主人「皆、有難う、面白い話をたくさん聞かせてもらった。ここから娑婆に出られるようになったら、皆の話をネタにして小説でも書こうよ」

ゲストさん「そうだ、もう遅いので皆、寝ようよ。隣の樋口一葉から『うるさい、寝れないじゃないか、いつまでしゃべってるの』って苦情が来るよ」

レジの主人「明日は、それぞれ旅立っていくだろうが、皆、達者でな。おやすみ」

鈴木理髪店の外の人通りもなくなり、夜はふけていった。レジの主人は明日も、また新しい仲間がやってくれば、また面白い話を聞かせてもらえる、皆との別れも寂しくないなと思った。